



## 学位論文審査結果の要旨

シャガールの作品は、ともすれば単に「新鮮な夢のような」（外山卯三郎）作品と解釈され、人口に膾炙してきた傾向がある。それは我国だけではない。意味不明なために「シュールレアリズム」として分類してきた西欧においても、シャガールを理解していない点では同じである。それに対して、シャガールの作品をその出自のユダヤ世界にまで戻して、一見意味不明な細部を説明し、さらにシャガールの全作品を支えていたのが、ユダヤ神秘主義のハシディズムであったことを実証したのが本論文である。

そもそも出発点には、ユダヤ人に「芸術」は可能かという問がある。すなわち旧約聖書の偶像否定と、美術を成立させた新約聖書との整合性である。旧約聖書における、原罪による「神」と「もの」に断絶のままでは、過ぎ去ってゆく空しい「もの」に意味はなく、芸術は不可能である。しかし断絶を踏まえて、受肉によって、芸術は「もの」によって永遠を表象できるとするのが、キリスト教である。それに対して、ユダヤ人が「もの」を肯定する根拠は、ユダヤ神秘主義のハシディズムであった。本論文は、その着眼点から、ユダヤ人宗教哲学者マルチン・ブーバー（1878-1965）のハシディズムとの比較において、シャガールが自ら残した文章のなかで、ハシディズムの考え方である「神の火」に言及している個所を提示し、それによってあらゆるものが聖性を帯び、芸術が可能となることを示す。しかしその受肉論を欠く物質肯定は、「もの」とそれが表象する神と永遠との区別を無効にする可能性がある。シャガールにおける「もの」と永遠の関係性については、今後の課題であるが、ユダヤ教における造形美術の根拠を詳細に示したところに本論文の意味がある。

なおシャガールに関するロシア語文献を始め、わが国において初めて紹介される文献への指示が数多く、さらにユダヤ美術に関するエルサレム大学刊行の雑誌『ユダヤ美術雑誌（Journal of Jewish Art）』と『ユダヤ美術（Ars Judaica）』は勿論、ベラルーシのシャガール記念館発行の紀要も丹念に渉猟しており、博士論文の必要条件である網羅性も満たしている。ロシア美術研究者は日本では少なく、ここにロシア美術研究者として二人目を出すことができたことは本学の誇りである。